

〈音楽〉

自己のイメージや感情を言葉や音で表現できる生徒の育成

—— 箏と口唱歌・創作・鑑賞を関連させた指導の工夫を通して（第 2 学年） ——

沖縄県立北中城高等学校教諭 金城 敦子

I テーマ設定の理由

情報技術の飛躍的な進化等を背景として、多様な主体が速いスピードで相互に影響し合う等、先を見通すことがますます難しくなっている。しかし、このような時代だからこそ、私たちの社会や人生、生活を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしていくことが重要である。『高等学校学習指導要領解説芸術（音楽 美術 工芸 書道）編（平成 30 年 7 月告示）』（以下、「解説芸術音楽編」）では改訂の趣旨及び要点として、「感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められるところである。」と課題が示されている。

本校では、1 学年時に芸術科目を音楽・美術・書道の中から生徒の興味・関心に応じて選択し、選択した科目を 2 学年時も継続履修する。音楽の学習における生徒の実態は、幅広い活動に対して楽しみながら意欲的に音楽活動に取り組むことができる。特に器楽活動時に取り組む郷土の楽器である三線においては、地域性（エイサーが地域の文化として根付いている）があり、小中学校で学んだことのある生徒も多く、指示なしでもお互いに教えあったり、既習曲以外の曲を演奏したり積極的に取り組む姿が見られる。また本校の体育祭ではエイサーの地謡を生徒たちが務め学校行事を盛り上げている。しかし、これまでの学習活動を振り返ると表現活動や鑑賞活動時に「今、演奏（鑑賞）した曲の音（音楽）からイメージされることは？」との問いに対して答えられる生徒は少なく、また「今、練習している曲をもっと表現豊かに演奏するためには？」という問いに対しては、「ひたすら練習する」「しっかり音を合わせる」等、技術的な側面で音楽を捉えており、音や音楽から喚起される自己のイメージと結び付け考えたことを言葉や音で表現する力が弱いと感じている。自身の実践でも、表現活動においては扱う楽曲を上手に演奏できるよう技術的な指導に偏り、鑑賞活動では楽曲のもつイメージを教師自身の主観に結び付けていく指導となっていた。

そこで、器楽（箏）と歌唱（口唱歌）・創作の表現領域及び鑑賞領域を関連させ、それぞれの活動において共通事項を踏まえ授業展開を工夫し、生徒が音や音楽から知覚・感受したことを自己のイメージや感情と結び付けて言葉や音で表現できる力を育みたい。本校の生徒は三線を通して、郷土の伝統音楽や文化に親しみを持ち積極的に活動していることから、三線の活動は、文化的・歴史的背景や音や音楽に対するイメージを他の活動に比べ捉えていると考える。普段、和楽器の一つである箏に親しむ機会は少ないが、お正月にテレビ CM の BGM として扱われるなど、和の雰囲気や音の余韻など音色から様々なイメージを持ちやすい。また、日本音楽や箏が持つ独特の音色、音質やリズム、テンポ感などから音楽を形づくっている諸要素を知覚・感受しやすく自己のイメージや感情を表現する活動に効果的だと考える。

本研究では、箏と口唱歌・創作・鑑賞を関連させた指導の工夫を行い、音や音楽から知覚・感受したことを、自己のイメージや感情と結び付けて言葉や音で表現できる力を育むことに繋がるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

題材「箏に触れ和の響きを味わおう」において、箏と口唱歌・創作・鑑賞を関連させた指導の工夫

を行うことで、音や音楽から知覚・感受したことを、自己のイメージや感情と結び付けて言葉や音で表現できる生徒の育成に繋がるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 自己のイメージや感情を言葉や音で表現できる生徒について

自己のイメージについて柴崎雄一郎（2010）は、「自己の経験から頭の中で直感的に感じて思い浮かぶ像」と述べており、解説芸術音楽編においても「中学校音楽科での学習を基礎にしつつ、新たに習得した知識や技能、これまでの生活経験などを踏まえて（後略）」と示されている。感情については、大辞林第三版（2006 出版）に「喜んだり悲しんだりする、心の動き。気持ち。気分。ある状態や対象に対する主観的な価値づけ。」と記されている。

本研究では、箏、口唱歌・創作・鑑賞それぞれの学習において、自己のイメージや感情を音や音楽から知覚する手立てとして『高等学校学習指導要領（平成 30 年 3 月告示）（以下、指導要領）』第 7 節芸術第 2 款各科目第 2 音楽Ⅱ〔共通事項〕（1）アに示されている「音楽を形づくっている要素」を意識した発問や対話的活動、ワークシートの作成を行う。生徒に音楽を形づくっている要素を知覚させることにより、音や音楽を自己のイメージ（自己の経験から頭の中で直感的に感じて思い浮かぶ像）や感情（心の動き。気持ち。ある状態や対象に対する主観的な価値づけ）と結び付けて考えることができるであろうと考える。以上のことから、本研究では自己のイメージや感情を言葉や音で表現できる生徒を、音楽を形づくっている要素と自己のイメージや感情と結び付けた言葉や音で表現していると捉え研究を進めていく。なお、音楽科の授業で言語を用いて思考したり話し合ったりする際には、これまでの生活経験等で身に付けた日常使用している言語のほかに「音楽を形づくっている要素を知覚・感受したと捉えられる言葉」が必要になってくる。そこでこれらの言葉を「音楽を形づくっている要素」ごとに整理し、解説芸術音楽編等を参考に生徒が発言するであろう言葉を予想し、「音楽の言葉集〈日本の伝統音楽編〉（以下、音楽の言葉集）」を作成した（表 1）。

表 1 音楽の言葉集（日本の伝統音楽編）

	音楽を形づくっている要素（諸要素）	知覚したと捉えられる言葉	感受したと捉えられる言葉
ア	音色	「箏」、「三線」、「尺八」、「鼓」 「ピッチカート」、「流し爪」、「響き」等	「明るい」、「輝かしい」、「優しい」、「柔らかい」 「力強い」、「凛とした」、「甘い」、「切ない」、「悲しい」等
イ	速度	「速い」、「遅い」、「rit」、「序破急」 「ゆったりと」、「テンポの揺れ」等	「だんだん落ち着く感じ」、「迫ってくる感じ」 「だんだん焦っていく感じ」等
ウ	旋律	「音が跳ぶ」、「レガート」、「音階」 「音型」、「上っていく」、「下がる」等	「流れるような感じ」、「和の雰囲気」 「山を登る感じ」、「坂道を下る感じ」等
エ	リズム	「リズムカル」、「一定」、「不規則」 「細かい」、「ゆるやか」等	「躍動感がある」、「弾むような感じ」、「軽やか」 「リズムの波が少なく穏やかな感じ」等
オ	テクスチャ	「主旋律と副旋律」、「ハーモニー」 「旋律の掛け合い」、「応答」等	「呼びかけたり答えたりと会話している感じ」 「音の重なって重厚な感じ」等
カ	形式・構成	「反復」、「変化」、「対照」、「また戻る」等	「くりかえされ強調されている感じ」 「また戻ってきて安心する感じ」等

2 共通事項について

指導要領では、表現と鑑賞の学習に共通に必要な資質・能力として、共通事項（表 2）が新設された。共通事項について解説芸術音楽編では、「〔共通事項〕は、表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力であり、「A 表現」及び「B 鑑賞」の各事項の指導と合わせて適切に指導する必要がある。」と示されている。音楽を形づくっている要素とは指導要領において「音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などを指す。」と示され、本研究では、共通事項アに着目し研究を進める。

表 2 共通事項（表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力）

(1) 「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることが出来るよう指導する。	
ア	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。
イ	音楽を形づくっている要素及び音楽に関する用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解すること。

3 表現活動と鑑賞活動の関連学習について

(1) 関連学習について

解説芸術音楽編には、「他の領域および分野で学習したことやこれまでの音楽経験、自らの解釈などを踏まえ、演奏する場面や目的などに関わらせながら、個性豊かに、曲に対するイメージを膨らませることができるようにすること」と示され、関連させた学習を通してイメージを膨らませる能力を育むことが求められている。表現及び鑑賞の活動において共通に必要な資質・能力を育成する事項として共通事項が示されているが、その共通事項について寺田貴雄（2019）は、「表現と鑑賞の各音楽活動を通して、実際に鳴り響く音楽の中で（中略）音楽を形づくっている要素を知覚し、音楽の特質や雰囲気を感じ、用語や記号などを理解していくこと、これらを具体的な音楽体験の中で一連のものとして学習することが大切である。」と共通事項の意義について述べている（図1）。以上のことから、表現領域と鑑賞領域は相互作用があり、関連させた学習を行うことによって、知覚・感受したこととイメージや感情との繋がりがより明確になり、言葉や音で表現しやすくなるであろうと考えられる。本研究では、2領域の各活動を関連させた指導を（表3）のとおり行う。

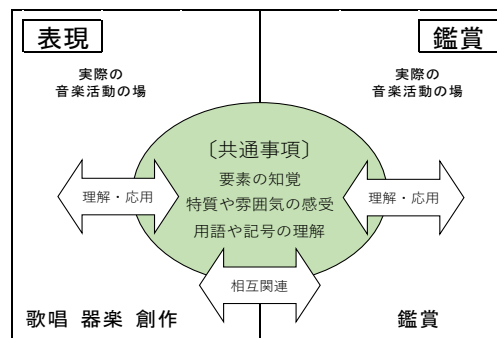


図1 表現と鑑賞の関連

表3 各活動を関連させた指導

活動領域	活動	学習活動	他活動との関連
表現領域	器楽（箏）	箏を演奏するための奏法を学ぶ 箏の音色や和楽器独特の特徴を知る	口唱歌や歌詞での歌唱、鑑賞から知覚・感受したことを音で表現しやすくなる
	歌唱（口唱歌・歌詞）	箏の音を声で表現する	口唱歌により、箏の音を表現することで、実際の音色を、より知覚・感受しやすくなる
		「さくらさくら」を歌詞で歌う	歌詞で歌い内容を理解することで、情景がイメージしやすくなり器楽演奏や創作活動もしやすくなる
	創作	イメージしたことを言葉で表し、音に結び付けていく	自己のイメージや感情を基に創作した前奏を、器楽（箏）により音や音楽で表現する
鑑賞領域	鑑賞	箏の音色や和楽器独特の雰囲気や特徴を知覚・感受する。鑑賞楽曲の文化的・歴史的背景を知ること、時代背景や楽曲解釈が深まり、情景や心情をイメージしやすくなる	鑑賞活動で、音楽から知覚・感受したことを言葉で表す活動を行うことで、次の創作活動において言葉で表したイメージを音や音楽に結び付けて表現しやすくなる

(2) 箏について

箏は和楽器の中でも音域が広く、音量も豊かである。奈良時代に中国から雅楽の楽器とし伝わった。通常、桐の木で作った胴に13弦を張り柱と呼ばれる駒を動かして音の高さを調節する。江戸時代に八橋検校（1614～1685）が、今日の箏曲の基礎を築いたとされている。その後、関西で発達した生田流と江戸で創始された山田流に分かれた。明治から昭和にかけて活躍した宮城道雄（1894～1965）が、奏法の拡大、雅楽や洋楽との合奏など新たな可能性を追究した。箏は、爪や弾き方、楽譜の記譜方法などが流派により異なる。

本研究では、三線の授業において、工工四を既習している生徒にとって縦書き楽譜が馴染みやすいであろうと考え、生田流家庭式縦譜を用いる。また、調弦法は日本古謡「さくらさくら」や箏曲「六段の調べ」の調弦で使用される平調子（都節音階）を用いて研究を進める。都節音階の醸し出す感覚やイメージを、同じ五音音階の沖縄音階との比較を行い、箏の響きから得られる和の雰囲気などを味わわせたい。

(3) 口唱歌について

指導要領では、旋律やリズムだけではなく、その楽器の音色や響きなどを表す手立てとして

「口唱歌」が新しく示された。実際に宮内庁楽式部などで和楽器の技術を身に付けるために音や奏法の特徴を言葉で表した唱歌が用いられており、伝統的な技能の習得方法である。また、唱歌により旋律を覚えたり、伝えたりもする。器楽学習で口唱歌を用いることにより、響く主体を楽器ではなくその人自身とし、その音や音楽を自らの音声を用いて表現することにより、対象をより自分に近づけて把握できると考えられる。本研究における口唱歌は、音や音楽の特徴や質を感じ取り、自らの音声で表現することで、旋律のまとまりや曲の流れ、余韻や間をより知覚・感受しやすくする手立てとする。

本研究では、歌詞で歌い曲の情景などをイメージした後、全員で口唱歌を歌い箏の音質や曲全体の流れや曲想、雰囲気把握する。日本古謡「さくらさくら」をペアで箏の練習をする際には、楽器の音を出さないもう1人が箏の音を聴きながら一緒に口唱歌で同じ旋律を歌う活動を行う。

(4) 創作活動との関連

解説芸術音楽編には、創作活動について、「生徒が表現したい音楽のイメージをもち、主体的、積極的に音を音楽へと構成していけるようにすること、(中略)生徒が創作する楽しさや喜びを味わうことができるよう配慮すること」と示されている。創作する楽しさや喜びを味わうためには、既習の知識やこれまでの生活・音楽経験を表現に取り入れ、それらを演奏を通して自分自身で感じ取ることができたり、相手にその表現意図が伝わることを重要であると考え。

本研究では、本来前奏が設定されていない日本古謡「さくらさくら」に前奏を創作する活動をペアで取り組ませる。口唱歌で知覚したことや、歌詞や楽曲全体の流れで感じたこと、教科書に掲載されているさくらの写真などからイメージしたことをワークシートにまとめ、まとめたイメージをもとに前奏を創作させる。この創作活動に取り組むことにより、自己のイメージや感情を言葉や音で表現できる力の育成へ繋がるであろうと考える。

(5) 鑑賞との関連

鑑賞活動では、音楽を形づくっている要素や文化的・歴史的背景との関わりを知覚・感受する視点とする。解説芸術音楽編には、科目の目標として「(1)曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び多様性について理解するとともに、(後略)」と示されており、文化的・歴史的背景などと音や音楽との関わりを捉えることは重要である。本研究で取り組む我が国の伝統音楽で使われる箏と既習の郷土の伝統楽器「三線」との比較鑑賞においても重要な視点となる。

本研究では、音楽を形づくっている要素や文化的・歴史的背景との関わりから気づいたことを個人でワークシートにまとめ、まとめた事を基にペアで伝え合い、対話を通して考えを深め、自己のイメージや感情を言葉で表現する力へ繋げたい。

Ⅲ 指導の実際（検証授業の指導計画）

1 題材名 「箏に触れ和の響きを味わおう」

2 題材の目標

- (1) 曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解を深めるとともに、イメージや感情を表現するために必要な技能を身に付けるようにする。

【知識及び技能】

- (2) 音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、自己のイメージや感情を思いや意図をもって前奏を創作するための創意工夫する力を養う。

【思考力、判断力、表現力等】

- (3) 主体的・協働的に音楽の諸活動に取り組み、感性を高め、音楽文化に親しみ、音楽によって生活や社会を明るく豊かなものにしていく態度を養う。

【学びに向かう力、人間性等】

3 題材の評価規準

(1) 知識・技能	(2) 思考・判断・表現	(3) 主体的に学習に取り組む態度
知 ①「六段の調べ」、「春の海」の曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解している。 ②楽器の構造や奏法と音色の特徴との関連について理解している。 技 ①楽器の音色や旋律の特徴と表現上の効果との関わりを、自己のイメージや感情を表現するために必要な技能を身につけている。 ②創意工夫を生かした音楽表現で「さくらさくら」の前奏を創作するために必要な技能を身につけている。	思 ①「さくらさくら」の音色やリズム、旋律、強弱、速度などの音楽を形づくっている要素を知覚するとともに、それらの働きを感受し、自己のイメージや感情を表現するため創意工夫し創作の表現意図をもっている。 ②「さくら変奏曲」、「春の海」、「六段の調べ」から楽器の音色などの特徴と表現上の効果との関わりを感じ取ったり、音楽を形づくっている要素と、それらの働きを理解して聴いている。	態 ①和楽器(箏)に親しみ伝統音楽への関心を持ち、演奏したり創作したり鑑賞したりする学習に主体的・協働的に取り組もうとしている。 ②「さくらさくら」の歌詞が表す情景や心情及び曲の表情や味わい、「六段の調べ」、「春の海」の曲想を生み出している音楽的な特徴などに関心をもち音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

4 指導と評価の計画 (全二次 8 時間)

(GS : 学習シート)

(WS : ワークシート)

次	時	学習活動	指導上の留意点	評価観点	評価方法
一	1	- 基礎的な技能の習得 - 箏の魅力に触れる。 「虫づくし」を使いペアで音の出し方などを確認する。	- 箏の扱い方(構え方、爪のはめ方)、構造や歴史、検校についてなど簡単に説明する。 - 材質や自然との関わり、製作工程の職人芸にも注目させ、日本の工芸品としての魅力や箏を扱う心構えを喚起する。 - 平調子で調弦をしておく。	知・技 思 態	観察 記述 観察 GS 1
	2	「さくらさくら」を歌詞で歌う。 - 口唱歌で「さくらさくら」を歌う。 「六段の調べ」「かぎやで風節」を鑑賞する。 - 箏で「さくらさくら」を練習する。1面の箏を2人で使用し口唱歌と箏演奏を交互に行う。(ペア学習)	- 歌詞を歌いながらイメージを広げさせる。 - 楽器の音をイメージし口唱歌で歌わせる。 「六段の調べ」の唱歌と演奏を聴かせる。 - ペアで口唱歌と楽器を交互に練習させる。 - 口唱歌は、器楽指導において箏の音色や響き等を知覚・感受しやすくする手だてのため特に評価の見取りは行わない。	知・技 思 態	観察
	3	「さくら変奏曲」を鑑賞する。 - 音色の特徴や音楽を形づくっている要素による表現上の効果を聴き取り知覚・感受したことを、ワークシートにまとめる。 「さくら」からイメージする事などを個人でワークシートにまとめ、ペアでまとめた事を伝え合い考えを深める。	- 音楽を形づくっている要素を意識させる。 - 歌詞や写真、前時イメージしながら歌ったことを振り返り情景や心情を考えさせる。 - 音楽用語が出てこない生徒に対しては、言葉集を示しながら自分の感情やイメージを記入するよう促す。 - 考えたことをお互い伝え合うよう促す。	知・技 思 態	評価の見取り① 観察 記述 WS 1
	4	「さくらさくら」を口唱歌で歌う。 「さくらさくら」の練習をする。 - ペアで感じたことを伝え合う。	- 音色、リズムや箏の響きなどから知覚・感受したことをもとに箏の音色を口唱歌で表して歌うよう促す。 - 口唱歌と箏演奏を交互に取り組ませる。 - お互いで箏の音色と口唱歌を関連付けて練習するよう促す。	知・技 思 態	観察 評価の見取り②
二	5	「春の海」を鑑賞する。A-B-Aの構成、箏と尺八との旋律の絡み、テンポ変化などに着目して聴く。 - 文化的・歴史的背景を知り情景をより深く味わって鑑賞する。 - ワークシートに知覚・感受したことを、まとめる。	- 箏と尺八の音色の特徴と音楽を形づくっている要素を感じ取りながら聴かせる。 - ワークシートにイメージしたことや感じたことを自分の言葉で記入するよう促す。 - 自分の言葉で難しい際には、音楽の言葉集を参考にするよう促す。	知・技 思 態	記述 WS 2 評価の見取り③
	6	- 自分のイメージや感情に合わせた「桜」をイメージし、イメージと音を結ぶ。 「さくらさくら」の前奏を個人で創作する。 - 創作した前奏部分を、メモや図形譜などで、書き記し再現可能なようにする。記譜が難しい際には動画撮影用タブレットで録画する。	- 鑑賞で感じ取ったことも生かして自分の表現したい「桜」を言葉と音で表す。(例)花びらが散る→高い音から低い音へ向かう等を感じさせ、音での表現を見取る。 - 桜の写真や楽曲の時代背景から知ったことと自分の生活経験を生かして自分事としてイメージし創作に生かすよう促す。 - 音楽を形づくっている要素(音色、リズム、旋律など)を知覚・感受し、主体的・創造的な音楽表現が出来るよう促す。	知・技 思 態	観察・記述 WS 3 評価の見取り④
	7	- 創作で個人が作った前奏を披露し合い共有する。 - ペアで話し合い、一つの作品にまとめる。 - オリジナルの簡易楽譜(メモなど)や図形譜などを作成する。	- お互いの作品をペアで共有しイメージを伝え合う。 - お互いで、練り合い一つの作品へ仕上がるよう対話的・協働的活動を促す。楽譜の記譜を、工夫させる。その際、オリジナルの図形譜などでも良いと伝える。	知・技 思 態	観察・記述 WS 4
	8	- ワークシートにペアで作成した桜についての紹介文をまとめ発表。 - 他のペアの作品を鑑賞し感想を記入する。 - まとめ(自己評価表記入など)。	- ペアで作成した作品を発表する際、どのようにイメージしてどのような桜を前奏で表現していると自分のイメージや感情を言葉と音で伝えられるように促す。 - 本題材の振り返りを行わせる。	知・技 思 態	観察・記述 WS 5 評価の見取り⑤

5 本時の学習内容（7・8／8時間）

(1) 本時の目標

- ①「さくらさくら」に前奏を創作し、ペアでイメージを共有し一つの作品に仕上げる。
- ②前奏付「さくらさくら」を紹介文（イメージを言葉で伝える）とともに発表する。

(2) 本時の展開

	学習目標と学習活動	指導上の留意点	具体的な評価規準と評価方法
導入	・前時のワークシートを振り返る。 ・連想リズムゲームを行う。 ・本時の学習内容を知る。	・前時の復習を行い前回の創作で音楽の諸要素（言葉集）がどのように創作の表現につながったか確認しながら振り返らせる。 ・イメージする力のトレーニングとして取り入れる。	
	学習目標：「さくらさくら」に前奏を創作し、ペアでイメージを共有し、一つの作品に仕上げよう！		
展開①（第7時）	・10秒即興前奏リレー活動を行う。 ・2人ペアでの活動とし1面の箏を ・2人で共有する方法を示す。  学習活動：個人でイメージした前奏を、ペアで情報交換し合い、「私のイメージした、桜は、〇〇〇で、〇〇〇と表現しました。」とお互い伝え合う。そこで、お互いの良さを共有しあい、何故、このように表現したかを伝え合いペアで1つの作品に仕上げよう。	・即興的な演奏を試してみることによって表現の幅を広げ自由な発想を引き出す。 ・1人がトレモロ、1人がメロディーなど例を示す。（連弾） 	・伝統音楽（箏）の特徴に関心を持ち、主体的に取り組もうとしている。（観察） ・音楽を形づくっている諸要素を絡め創作活動に取り組もうとしている。
	・お互いのイメージを共有した後ペアで表現する「さくら」のタイトルを二人で練り合い一つのタイトルを付ける。 ・ペアで知覚・感受したことや、気づいたことなどを共有する。	・情景を思い浮かべながら、ペアでイメージした情景をお互い言葉で伝え合いながらイメージに近い音を選び言葉と音を結びつけていくよう促す。 ・発表に向けて、何故このような表現を行ったのかを相手に伝えるように言葉と音で表現するよう促す。	・意欲的に創作活動に取り組んでいる。（記述WS4・観察）
展開②（第8時）	・ペアで「さくらさくら」前奏付きを練習し発表する。  例「タイトルは、『川のせせらぎと小鳥のさえずる桜』です。前奏は、川の水の流れる音と小鳥が桜の木からさえずる姿をイメージしました。 ・発表を聴いて、コメント表に、良かった点や感想（知覚・感受したこと）を記入する。	学習目標：前奏付「さくらさくら」を紹介文とともに発表しよう！ ・タイトルとイメージの表現を言葉で伝えて演奏発表を行うよう促す。  ・他のペアの演奏を聴いて、良かった点や知覚・感受した感想などを音楽の諸要素を用いてコメント表に記入するよう促す。	・伝統音楽（箏）の特徴に関心を持ち、主体的に取り組もうとしている。（観察） ・意欲的に発表活動に取り組んでいる。（観察） ・音楽を形づくっている諸要素を言葉と音に結び付け考えることが出来る。（記述WS5）
まとめ	・本時の学習を振り返るワークシート自己評価を記入する。 ・本単元の学習を振り返る。	・本時の授業の自己評価をワークシートに記入する。	

6 仮説の検証

研究仮説に基づき、題材「箏に触れ和の響きを味わおう」において、箏と口唱歌・創作・鑑賞を関連させた指導の工夫を行うことで、音や音楽から知覚・感受したことを、自己のイメージや感情と結び付けて言葉や音で表現できる生徒の育成へ繋がったかを検証する。検証には、事前アンケート、検証授業による行動観察、ワークシートの記述、発言、実際の発表及び創作演奏、事後アンケートに基づき行う。

(1) 口唱歌、歌唱（歌詞）と器楽（箏）活動との関連させた指導について

日本古謡「さくらさくら」を全員で歌唱した後に、箏の音色を知覚させるため、箏曲「六段の調べ」の鑑賞活動において箏の音色に触れ、音色の特徴を「さくらさくら」を用い口唱歌を通して表し、その後、箏を演奏する活動を行った。その際、唱歌、歌詞、弦名を同時に見ることが出来る生田流家庭式縦譜を参考にオリジナル楽譜を作成し使用した（図2）。

また、イメージする力を育むため、「さくらさくら」の歌詞から喚起される情景、「さくら」という言葉から思い浮かぶエピソードや「さくら」の絵や写真からイメージしたことについてワークシートに記入させた。その後、「さくらさくら」の曲中で自分が好きだと感じる旋律（節）を選択させ、選択した部分が、どのような動きをしているから、どのようなイメージへ繋がり好きだと感じたのかを、音楽の言葉集を参考に知覚・感受する活動を行った。その結果、情景のイメージでは、「きれい」「美しい」など視覚的、表面的なイメージのみを表現していた生徒も、音楽の諸要素と絡めた言葉で、旋律の動きを捉え感受したことを言葉で表現できるようになった（図3）。また、口唱歌後の演奏では（表4）のように、響きの余韻や音の長さに変容が見られたことや、ワークシートへ記入された感想（表5）で、「さくらさくら」の八七六の部分を表す「コロリーン」や「ツンツンテン」という口唱歌を、文章の中で音色として記入していた生徒や箏の音色や音の響き等について触れていた生徒が74%（23名中17名）いたことから口唱歌は、箏の音色を知覚することに有効であったと捉えられる。

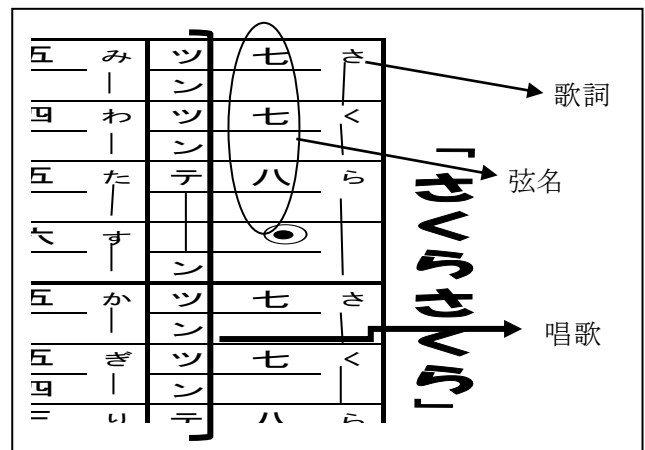


図2 「さくらさくら」オリジナル楽譜

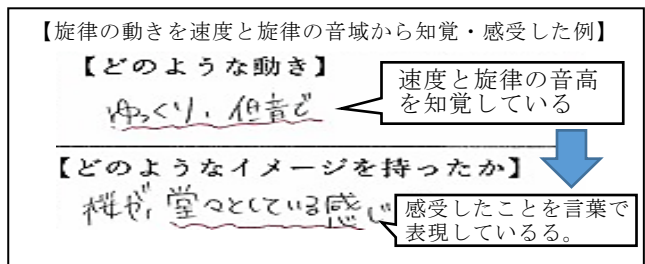


図3 イメージ力を高める活動のワークシートより

表4 口唱歌活動後の生徒の変容

口唱歌活動前	口唱歌活動後
間が感じられない演奏	間が感じられる演奏
余韻が無い	余韻がある
響きが無い	響きがある
音色のイメージが弱い	音色のイメージがある

- ・コロリーンが最初でできなかったけど、たくさんやるうちにできるようになっていった！！
- ・口唱歌について知ることができた。
- ・指で弾くのと響きが全然違った。
- ・初めて箏に触れて楽器から沢山の情景や場面を感じることができて楽しかった。
- ・音色が落ち着いていて響きが好きだった。
- ・「ツンツンテン」は言葉通りの音だと思った。

表5 口唱歌及び箏に触れての生徒感想より抜粋

(2) 鑑賞活動と関連させた指導について（第2・3・5時）

① 第2時「六段の調べ」の鑑賞活動（意識させる音楽を形づくっている要素：イ、ウ）

楽曲の持つ音楽の諸要素（速度、旋律の音の高低）を図形譜で表すことにより、音楽の諸要素を知覚することが容易になるであろうと考え「六段の調べ」の鑑賞活動の中で取り入れた。鑑賞活動は2回行ったが、1回目の鑑賞では、日本の伝統音楽には独特の間や拍の揺れがあることから拍の感覚が分からず、楽譜を見ながら鑑賞していても、どの部分を演奏しているのか、理解できない状態であった。そこで速度や拍子感を身につけさせるため、全員で曲に合わせて拍子打ちを取り入れた。拍子打ちの後に行った2回目の鑑賞では、速度と拍子を感じながら間も感じ

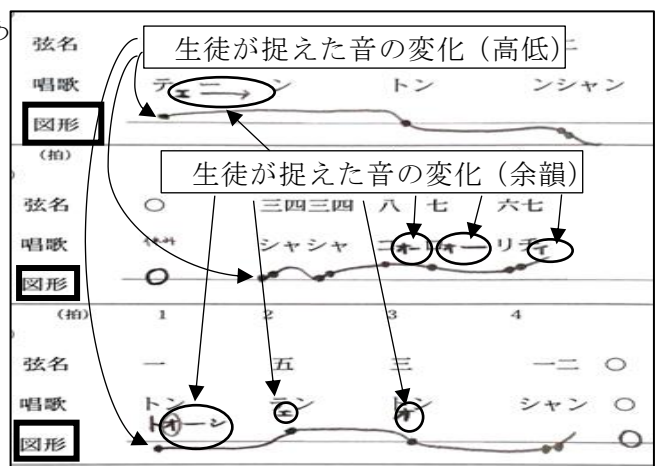


図4 生徒が作成した図形譜

たり、速度の変化を捉えることが出来るようになった。その後、「六段の調べ」の口唱歌を聴いて図形譜に表す活動を行った（図4）。図形譜で表す事により、速度の変化や旋律の音の高低を視覚的に知覚するとともに、口唱歌の効果や間合い、余韻などを知覚・感受することへ繋がったと考えられる。

また、沖縄の伝統音楽（琉球古典音楽）「かぎやで風節」と比較させたところ、「古い音楽は独特の間がある。」「拍の掴みにくさが美しいかも？」「テンポのゆっくりした感じが落ち着いていて上品。」などの発言があり、日本と沖縄の伝統音楽の共通性についても理解することへ繋ぐことができた。

② 第3時「さくら変奏曲」の鑑賞活動（意識させる音楽を形づくっている要素：ア～エ）

第3時では、音楽の言葉集を参考に、自己のイメージや感情を音楽の諸要素と絡めて表す活動を行った。音楽の言葉集を参考に組み合わせたため、諸要素と絡めて書くことができる生徒も第1時と比べて増えてきたように感じた。しかし、知覚・感受する力がまだ足りない生徒や自己のイメージは持てても、音楽を形づくっている諸要素と結び付けることに苦労している生徒が見られたため、机間指導の際、（表6）のような発問を行った。その結果、イメージと音楽の諸要素を結び付けた表現ができるようになった（図5）。

表6 苦労している生徒へ発問した例

教師の問いかけ	生徒からの回答	感受との結びつき
「春を色で表すと？」 「暖かい、寒い？」	「淡いピンク」 「暖かい」	「音色」⇒柔らかい
「満開」のイメージって？ 花は多い？少ない？ 音は多い？少ない？ どんな花が咲いている？ 木のどの辺に 咲いているの？	「花が、たくさん咲いている」 「花が多いから音も多くなる」 「色々な音がいっぱい」 「濃い花から薄い花まで、いっぱい」 「さくらの木の上の部分から下の部分まで、全体的に咲いている」	「満開」を音で表すと・・・ 音の数が多くて音域も 高音から、低音まで、 色々な音が出て満開を 表現する。

【桜の花びらが飛ぶ情景をイメージし速度変化（音楽諸要素）を捉えている例】

テンポが速くなったりして、風がふいていてさくらの花びらが飛んでいる様子

速度変化を捉えている様子が見取れる。

図5 音楽の諸要素と絡めて言葉で表現が出来るようになった生徒のワークシート例

③ 第5時「春の海」の鑑賞活動（意識させる音楽を形づくっている要素：オ、カ）

「春の海」は、西洋風な構成の中に日本の独特な雰囲気を持つ楽曲である。楽曲の構成がA→B→Aとなっており、情景の変化が感じ取りやすいと考え第5時の鑑賞活動に設定した。鑑賞に入る前に、作曲者の生い立ちや作曲者の曲に対する思いについても触れた。作曲者の思いや文化的・歴史的背景と、テンポの変化、箏と尺八のテクスチュア、構成との関わりを知覚・感受し、音楽の諸要素と絡めて知覚・感受したことを言葉で表現する活動を行った。87%（23名中20名）の生徒が、（表7）のように自己のイメージと音楽の諸要素と絡めて表現できるようになった。また、本時のワークシートでは、音楽の言葉集を使用したかとの問いに対し91%（23名中21名）の生徒が使用したと回答した。使用していないと回答した9%（23名中2名）の生徒は、「前の時間まで言葉集を使用していたけど、使わなくても自分

表7 テンポの変化やテクスチュア、構成を捉えた例

曲の場面	それぞれの雰囲気から知覚・感受したこと
Aの情景	・リズムがゆったりとして落ち着いた感じ。 ・箏の音がゆっくりで穏やかな波を表している感じ。 ・柔らかい波のような感じ。
Bの情景	・テンポが速くなり明るく祭りのようだ。 ・だんだん気持ちが高ぶる。箏と尺八の賑やかな掛け合い。迫ってくる感じ。 ・リズムや速度の変化により春の海に変化が出た。 ・リズムカルでスキップしている感じ。 ・尺八の音が鳥のさえずりを表している会話している感じ。
A 終わりの情景	・テンポが初めに戻り穏やかな感じ。 ・最初と同じ雰囲気で波が落ち着いてきた。 ・箏は、波、尺八は風を表していると思う。

の言葉で記入できる。」と回答した。以上のことから、音楽の言葉集は、音楽の諸要素と絡めた言葉で表現する手立てとして有効であったと捉えられる。また、音や音楽から知覚・感受したことを、自己のイメージや感情を言葉で表現できる力の育成へ繋がるツールであると考えられる。

(3) 創作活動と関連させた指導について（第6・7・8時）

鑑賞活動や器楽（箏）活動で学んだ知識や技能を活かし「さくらさくら」に前奏を付ける創作活動を行った。第1時～第5時において音楽の言葉集を活用し、音楽の諸要素と絡めて、自己のイメージや感情を表現する活動を繰り返し行い、知覚・感受する力を高める指導の工夫を行ってきた。第6時においては、自己の持つ「さくら」のイメージを音（音楽の諸要素）と結び付けて表現する活動の後、個人で前奏の創作を行った。第7時では、事前アンケートより

生徒A	生徒B	生徒C

図6 生徒の創作した前奏より

相手へイメージや感情を伝える事（発表など）に対して抵抗感があると答えた87%（23名中20名）の生徒への手立てとして、全体場で発言しやすい雰囲気づくりを次のとおり導入時に行った。「春」から連想されるイメージをリズムに合わせて即興的に言葉で表現するリレー形式のリズムゲームを取り入れた。また、教師が提示したお題に対して、10秒間で自己のイメージや感情を即興的に音で表現する創作リレーを行い様々な表現パターンを視聴することで、お互いの表現の良さを認め合う発言が見られた。この活動から発表への抵抗感や緊張感を取り除き、発表しやすい雰囲気づくりにおいても効果があったと考える。その後、前時で創作したものをペアで共有し練り合い、全ペアが協働創作による前奏を作ることができた。ペアで創作した楽譜の数例を（図6）のとおり示す。創作の際、記録方法として楽譜や図形譜を作成したり、記譜が難しい生徒については、タブレットで動画撮影し、表現が同一のものとなるように動画を活用させた。第8時では作品発表を行った。発表では①タイトル発表→②イメージした「さくら」や情景の説明→③イメージを表現するために工夫した部分の説明→④演奏という流れで進め、各グループの演奏に対しては、良かった点やタイトルやイメージ、工夫した部分から知覚・感受したことなど音楽の諸要素を絡めた感想を記入するよう指示した。

(4) 自己のイメージや感情を言葉や音で表現することができたか

検証前の事前アンケートでは、自己のイメージや感情を言葉や音で表現することが得意と答えた生徒は17%で、得意ではないと答えた生徒が83%であった（図7）。その理由として、言葉で表現する際、96%の生徒が「適切な言葉が見つからない」や、「どのような言葉で表現すればよいか分からない」と回答した。音楽の授業において知覚・感受したことを言葉で表現する際には、音楽を形づくっている要素を

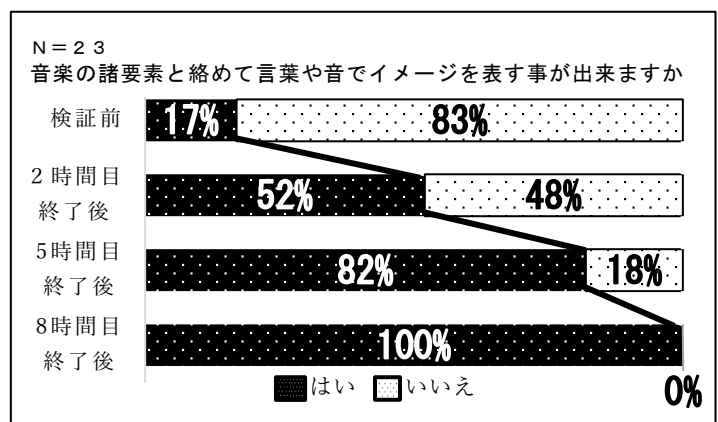


図7 生徒の変容

絡めた言葉が必要になる。そこで、音楽の言葉集（日本の伝統音楽編）を作成し、検証授業に取り入れた。音楽の言葉集を繰り返し使用し活動を行ったことで、第5時「春の海」の鑑賞後のワークシートでは、82%の生徒が言葉で表現できると回答した。8時間目（創作

発表) 終了時のワークシートでは、クラス全員が自分なりのイメージを持ち、音楽の諸要素と絡めて言葉や音で表す事ができると回答した。また、発表会後の生徒の感想(表8)では、自己のイメージや感情を言葉や音で表現できたことや、緊張したが発表まで成し遂げられたという事など、自信や達成感が得られたという記述が見られた。「もう少し探究する時間が欲しかった」と更なる意欲の高まりや、「ペア同士で色々な案が出て、それを一つにまとめていくのが、おもしろかった」とペアで活動することで、お互いの意見を共有し協働的に創作することで、思考し判断する様子などを感想から読み取ることができた。また、言葉で表現することが苦手であった生徒も梓いっぱいコメントを記入する姿が見られた(図8)。他のペアの演奏を鑑賞することで、思考力の高まりや感性の広がりも見取ることができた。以上の結果より、箏と口唱歌・創作・鑑賞を関連させた指導の工夫を通して自己のイメージや感情を言葉や音で表現できる生徒の育成に繋がったと考える。

表8 発表後の生徒の感想(ワークシートより)

●出来るようになったという自己達成感、満足感を得たことが見取れる感想	
【生徒A】	考える授業は苦手だったが、少し出来るようになったから良かった。
【生徒B】	箏を触ることが初めてで発表までやって緊張したけど、皆の前で自分達の考えを音にして発表出来たのが嬉しかった。
【生徒C】	初めは難しいと思ったが、進む中で相手に伝える所まで出来た。
【生徒D】	最初はイメージを言葉にすることが難しかったが今は前よりイメージを言葉で伝えることが出来た。
【生徒E】	感情を音にして表す事ができたし伝わった。他の人の演奏を聴いて感情も感じた。
【生徒F】	自分のイメージを相手に伝えるのが苦手だが、箏をやって少しは出せたかなと思うので良かった。
【生徒G】	気持ちを音で表現するのは初めてで難しかったけど、音で伝えることが出来て楽しかった。
●更なる意欲の高まりや楽しさが見取れる感想	
【生徒H】	もう少し探究する時間が欲しかった。
【生徒I】	音で自己のイメージや感情を表現するのは難しかったけど、創作していくうちに、色々な案がペア同士で出たので良かった。他のペアの前奏も試してみたい。
【生徒J】	自分のイメージや感情を箏を通して音で表す事ができたと思う。楽しかった!!又、やってみたい。
【生徒K】	自分で前奏を作ってみたりイメージを音で表現することがとても楽しかった!!

揺れる桜	二人で同時にひいていてシンクロ感良かった。 リズムカルで明るさが聞いて分かった。
新春	新しい春がきたような感じをどんどん音を上げて行って表現しているのがよかった。
しだれ桜	しだれ桜の流れるような感じを連続でひいて表していたのがよかった。
雨上がりの桜	雨にも負けないような力強い桜という感じが聞きとれてよかった。
春の終わりの訪れ	春が終わってしまうという悲しいかんじが高い音から低い音へと変わっていくところから感じれて良かった。

図8 他ペアへのコメント(ワークシートより)

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 表現活動及び鑑賞活動を関連させた指導の工夫を行うことで、どの活動においても音や音楽から知覚・感受する力が高まり、音楽を形づくっている要素を意識しながら表現及び鑑賞することができた。
- (2) 音楽の言葉集を参考に言葉で表現する活動を繰り返し取り組んだことで、音楽を形づくっている要素を踏まえ、知覚・感受したことを音楽の諸要素と絡めて自己のイメージや感情を言葉や音で表現することができた。
- (3) 前奏の創作及び発表の活動を通して、自己のイメージや感情を言葉や音で表現することができた。また、発表後の感想から他者へ伝える喜びや達成感を見取ることができた。

2 課題

- (1) 多様な音楽性が身につけられ、自己表現しやすい楽曲の選定及び各領域の効果的なバランスの工夫。
- (2) 他教科と連携し自己表現する力を身につけさせる指導の工夫。

〈参考文献〉

国立教育政策研究所 教育課程研究センター 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
文化庁 2019 令和元年度 伝統音楽指導者研修会資料

長谷川慎 2019 令和元年度 伝統音楽指導者研修会東京藝術大学邦楽コース長谷川慎編 楽譜資料

北山敦康 2019 『平成 30 年版学習指導要領改訂のポイント高等学校芸術(音楽)』明治図書

中等科音楽教育研究会編 『最新中等科音楽教育法 2017/18 年告示「中学校・高等学校学習指導要領」準拠』

音楽之友社

小島綾野構成 深海さとみ×山内雅子 ～対談より特集Ⅱ 箏の授業に「唱歌」を取り入れよう～

『教育音楽中学・高校版(2019年2月号)』音楽之友社

臼井学 2018 「新学習指導要領における芸術科(音楽)のポイント」中等教育資料平成 30 年 10 月号

文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領(平成 30 年 7 月)解説芸術(音楽 美術 工芸 書道)編』教育図書

文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領(平成 30 年 3 月告示)』

臼井学 2018 「生徒にとって意味のある音楽の授業実践に向けて」中等教育資料平成 28 年 8 月号

小島律子編著 2015 「音楽科授業の理論と実践 育成の原理による授業の展開」あいり出版

大辞林第三版 2006 三省堂

文部科学省調査官 峯岸 創監修・編 2002 日本の伝統文化を生かした音楽の指導 暁教育図書

〈参考WEBサイト〉

文部科学省 中央教育審議会答申(平成 28 年 12 月)(最終閲覧 2019 年 12 月)

文部科学省 新高等学校学習指導要領について(平成 30 年 7 月)(最終閲覧 2019 年 12 月)

楠見孝・米田英嗣 感情と言語藤田和生(編)感情科学の展望 (最終閲覧 2019 年 12 月)

柴崎雄一郎 表現を広げ、深めて踊る生徒を育てるダンスの学習指導 (最終閲覧 2020 年 2 月)